

長崎だより

長崎の情報を
お届けします

FFG調査月報の姉妹誌「ながさき経済」を発刊している、ふくおかフィナンシャルグループの長崎経済研究所。長崎の旬な情報を提供するコーナー「長崎だより」の今月号は、株式会社INTERMEDIAの代表取締役であり株式会社水脈(mio) 代表取締役も務めている佐々木 翔様から「今、私が長崎に貢献できること」と題し寄稿していただきました。

長崎経済研究所による「ながさき経済web」随時更新中!



当研究所が発信する最新の情報をメールでお届けします。

メールマガジンの登録はこちら▶



お問い合わせ

株式会社長崎経済研究所

長崎市銅座町1番11号
十八親和銀行本店内
TEL095-828-8859



ながさき経済web画面

長崎経済研究所とは

長崎県の経済・社会・産業動向などに関する調査研究及び企業経営や県民の生活のお役に立つ情報をご提供するとともに、各種経済・文化団体の事務局活動等を通じて、地域社会に貢献することを目指しております。





今、私が長崎に貢献できること

寄稿 株式会社INTERMEDIA
株式会社水脈(mio)
代表取締役 佐々木 翔

はじめに

はじめまして、佐々木翔と申します。島原市で建築設計事務所の代表をしております。福岡で約7年間、東京で約5年間過ごした後、島原へ帰る決断をしました。今回は地元へ帰ることを決断した経緯と、そこからどんな活動を行ってきたのか、そして今、どんなことに興味があるのかについて綴りたいと思います。

帰郷までに

私は当初から島原に帰ることを決めていたわけではありません。むしろあまりそのつもりは無く、大学時代を過ごした福岡か、社会人で暮らしていた東京か、都市的な場所ですら独立して設計事務所を立ち上げるイメージを持って大学以降の人生を過ごしていました。そこからの島原へ戻る決断に至ったのか、端的には二つあります。ひとつは物流とネット環境の安定で

Profile



インターメディア
株式会社INTERMEDIA
株式会社水脈(mio)
代表取締役 佐々木 翔

1984年長崎県島原市生まれ。
18歳まで島原市で育ち、大学・大学院時代は福岡在住。
東京の建築設計事務所で5年間の実務経験後、2015年に30歳で島原に帰郷。父親が経営していた建築設計事務所「INTERMEDIA」に合流。
2022年、同社代表取締役に就任。同じく、島原市の地域拠点交流施設「水脈 mio」の代表取締役も兼務。
長崎、九州、福岡、佐賀、鹿児島各大学の非常勤講師を務める。

INTERMEDIA



水脈 mio



す。島原でも2015年時点で翌日にはほとんどの物資が届くサービス(ASUKUやAmazonなど)が展開されており、光回線も開通しており、その状況だけ見れば都市的な環境と何ら遜色ない状況でした。たまたま帰郷する度にそのことに気づき、意外とこんな田舎でも仕事できてしまうんだなと実感していました。もうひとつは都市部と地方での建築設計者の立場の違いです。特に東京ではほとんどのエリアで人為的な開発が進んでおり、設計者として何か携わろうとしても相手が

たりして、何の人脈もなく実績もない独立したての私が活動するイメージが全く湧きませんでした。もしくは、とても小さな改修から仕事を始める選択肢もありましたが、あまり未来をポジティブに考えることが難しかったなと今では思います。

が大企業だったり規模が大きすぎ

一方で長崎・島原にたまたま帰ると、父がINTERMEDIAで進めていた仕事がとても魅力的なものばかりに見えました。ヒューマンスケールの程よい規模で、まだまだ新築の機運があり、クライアントとの距離も近い。また、自分がこれまでの人生で培ってきたものを、建築



2010年3月に竣工した長崎港松が枝国際ターミナル。大学院生時代にプロジェクトの一員として関わり、自身で図面を描いたものが初めて立ち上がり、我が子が生まれたような感動を覚えました。

を通して地元に戻元できるかもしれない、という喜びもあるような気がしました。少なくとも今、この時代で建築設計を行うには長崎へ帰ることが理想的に思えました。

建築設計の 専門家としての想い

そして2015年、私は長崎・島原へ戻ってきました。父が進めていたプロジェクトが多くあり、まずはそこをサポートする形から入りました。そして新規の依頼があれば、徐々に私の考えを、プロジェクトを通して形にしていく作業を繰り返していました。まず前提として、父やINTERMEDIAへのリスペクトがあります。少なくとも何も実績のない私に依頼が来ているわけではなく、父がINTERMEDIAで1989年から培ってきた実績や関係性の賜物であることが前提にあります。その中で私に何ができるのかを考えていました。その中でほぼ最初に携わったプロジェクトが「音楽ホールの山」でした。諫早市で依頼を受けた住宅のプロジェクトで、結果的にストップしてしまったのですが、建築界の若手の登竜門と呼ばれるSD Reviewで入選



音楽ホールの山
| 第34回SD Review 2015 入選 | 鹿島出版会



音楽ホールの山 断面イメージ

を果たし、そこから母校である九州大学の恩師から非常勤講師のお誘いを頂いたり、学生から卒業設計展の審査員として呼んで頂いたりなど、少しずつ私自身を知って求めて頂く場面が生まれてきました。それからしばらくは、あくまで建



長崎のカステラ工場 | Architects of the Year 2019 入選 | 日本建築設計学会

築設計の専門家として、長崎の社会やまちに貢献したいと思っていました。もちろんその想いは今でも根底にあります。もう少し開かれた貢献の仕方もあるのかもしれない、と思いはじめたのが2018年頃です。



武家屋敷オフィスの開設

INTERMEDIAの本社は島原市有明町にあります。有明町は平成の大合併までは南高来郡であり、農業・漁業等の第一次産業が盛んな町です。つまり周囲は田畑に囲まれた豊かな風景が広がっているのですが、それらはあくまで一次産業的なものであり、町並みや文化のようなものはあまりありませんでし



INTERMEDIA武家屋敷オフィス内部 | 長崎県島原市 | 2018-2022年

た。一方、車で15分ほど南下すると島原市の中心部があり、島原城を中心とした湧水にあふれた文化的な景観や町並みが今でも残っています。せっかく島原を拠点に暮らしているのであれば、そういった環境を目の前にして活動を行っていくと何か発見があるかもしれない、と漠然と感じ、INTERMEDIAのサテライトとして武家屋敷オフィスを開設することにしました。それが



INTERMEDIA武家屋敷オフィス【外観】

2018年です。

このオフィスの開設後、島原半島へ移住してきたスタッフが増えまし
た。大阪、東京、兵庫、香川、福島などなど、九州外の出身者が大半を占めています。2023年には更に東京からの移住者が2名増えていきます。

HOGET(西海市)や uminoわ(東彼杵町) での出会い・発見・渴望

そして、偶然なのか必然なのか定かではありませんが、この頃から設計するプロジェクト自体が少しずつ変化してきました。まず、リノベーションの案件が増え始めました。最初に実現したのは2018年、五島列島・小値賀町の「おぢか薬局」です。その翌年、2019年から西海市の「HOGET」、2020年には「uminoわ」のプロジェクトがスタートしました。この3つのクライアントはほぼ同年代・友人のよう

な間柄であり、いわゆる建築設計の議論だけでなく、そもそもなぜこの建築を必要としているのか、その用途の必要があるのか、日頃どんなことを課題として向き合っているのかなど、クライアントの根幹の部分まで根掘り葉掘り話を聞くことを行っていました。「おぢか薬局」に関しては、小値賀島に調剤薬局が無いという明確な課題があり設計方針を定めやすかったのですが、「HOGET」と「uminoわ」の共通の要件は「過疎化した場所では人が集う場をつくりたい」でした。まず私は設計者として、用途が定まっていない建築を設計できることへの高揚感がありました。今まで見たことのないような建築が生まれるかもしれないと思ったからです。同時に、過疎化が進行している長崎・島原にUターンしてきた身として、本当にそんな夢のような場所を実現できるのか、という期待感と懐疑的な気持ちが共存していた気がします。



おぢか薬局 | 長崎県北松浦郡小値賀町 | 2018年



HOGET | 長崎県西海市 | 2020年 | 撮影:YASHIRO PHOTO OFFICE



uminoわ (写真左下の三角形の建物) | 長崎県東彼杵町 | 2022年 | 撮影:YASHIRO PHOTO OFFICE

我々は場をつくる設計者の立場として、クライアントは運営者の立場として、とことん話し合いを重ねて、いずれも無事に実現に至りました。それから何度も足を運んでいます。びっくりするのは、「HOGET」や「uminoわ」に行くとき、必ず誰かと出会うんです。特に「HOGET」では、地元・島原では会ったことがない島原在住の方とこの2年間で何度も出会いました。

そこで僕は思ったんです。こういう場所はきつと身近に点在しているべきだと。SNSによって直接会わなくともコミュニケーションが図れてしまう時代だからこそ、また子供や孫が都会に居て身近に居ないことが多いエリアだからこそ、きつと物理的に出会い、話したり、新しい何かを見たり聞いたりすることを渴望しているんじゃないかと。それが僕が地元の島原で「水脈 mio」の活動を行う原動力になっています。

水脈へ込めた想い

「水脈 mio」は、2023年3月25日に開業を迎えました。前述のとおり、様々な人が気兼ねなく集い、行き交うような場を地元につくりたいという想いがあります。水脈はもともと「旧堀部家住宅」という築170年超の古民家で、島原市が所有しているものです。まず2020年12月、この建物をワーケーション施設として活用するための設計プロポーザルが行われ、我々を含む設計チームを選定頂きました。その後、2022年5月には運営のプロポーザルも実施され、こちらも島原市から選定頂き、運営も行うことになりました。つまり本業として施設設計を行うまでは「HOGET」や「uminoわ」と同じですが、はじめて運営まで担うことになりました。機能としてはカフェ、宿泊施設、ワーキングスペース、イベントスペース等が複合したものです。この中のワーキングス



水脈mio | 万町アーケードからの外観 | 2023年 | 撮影: taratine



水脈mio | 湧水流れる元炊事場とソファ | 2023年 | 撮影: taratine



水脈mio | 2階コワーキングスペース | 2023年 | 撮影: taratine



水脈mio | せせらぎの湧水庭と客室「喫」 | 2023年 | 撮影: taratine

ベースにはINTERMEDIAのサテライトオフィスも入っており、数名のスタッフが水脈を職場として日常的に出入りしています。つまり、INTERMEDIAのオフィスが地元を開かれた施設とも言えます。場所は島原市万町アーケードの中段に位置していて、雨天時にもアクセスは良好です。周辺に魅力的な飲食店や観光コンテンツが点在しているため、水脈ではあまり強いコンテンツを持たないようにし、むしろ島原に元々ある魅力的なものを紹

介し、実際にその場所にアーケードを介して行って頂くことで、島原全体の良さを知って頂くような取り組みを行っていきたいと思っています。例えば宿の夕食は、アーケードの向かいにある「お料理 まどか」にて提供します。例えばカフェで提供しているフードの食材はすべて島原半島内のものであり、必要があれば販売しているスーパーや生産者をご紹介しますこともできます。飲料水はすべてその日に汲んだ湧水であり、客室の庭や屋内にも常に湧水が流れてお

り、島原が育んできた文化そのものを実感することができます。島原の住民は、元々湧水所に集まり、野菜の泥を落としたり魚を捌いたり洗濯物をゆすいだりしてきました。水があり、そこに人が集う。そんなとてもプリミティブな振る舞いが残るこの島原で「水脈 mio」として、これからも人が集う場を展開していきたいと思っています。ぜひ皆さま、湧水で淹れたコーヒーを飲むだけでも、ゆったりとご宿泊頂く形でも構いません。何か水脈を活かした

イベントがあれば大歓迎です。ぜひ一度お越しください。そして、すべての活動の基本として、本業のINTERMEDIAがあります。これらの活動が本業の建築設計にどのような影響を与え、今後どんな建築を生み出しているのか。設計という行為そのものは場所を選びません。水脈で得た知見を、様々な場所で、様々な形で展開し、長崎に少しでもポジティブな貢献ができれば。そう思いながら、島原から日々活動していきます。